

国主義の形成過程を膨大な文献調査をもとに分析した本格的な歴史書である。本書に結実した文献渉猟の跡をみれば、ワシントンにあるナショナル・アーカイヴズに収められた議会関係文書はもとより、国務、海軍、財務および商務各省記録文書のうち1865年から1900年にいたる時期の全資料(sämtliche Materialien)、ライブラリー・オブ・ kongress と東部諸大学・諸機関の所蔵するヘイ、アダムズ兄弟、ロッジ、マハン、マキンリー、セオドア・ルーズベルトなどほとんど70人に及ぶ当時の有力政治家、官僚、実業家、政論家のマニユスクリプト・コレクション、そして2000種近い刊行文献からなっている。刊行文献は英語のものがむろん圧倒的に多いけれども、他方では、ドイツ語文献だけでなく、フランス語およびスペイン語の文献にも注意が配られている。本書は本文と注釈とでほぼ3対2の紙幅に分かれている。詳細な注釈はそれ自体得難い文献解題をなしている。こうした形式的側面だけからみても、すでに本書はアメリカ史のこの分野にたいする立派な貢献をなすものである。

## 2

著者によれば、本書に結実する研究はすでに1960年代前半にほぼ完了していたのだが、それが1974年になってやっと刊行のはこびとなったのは、この間合衆国本国において同じ資料を使って著者と似たような解釈を提出する学派が登場してきたため、新天地開拓の魅力がなくなったからであるという(著者はこの間、1969年に、別著『ビスマルクと帝国主義』を発表している)。ここに合衆国における新しい学派というのは、1960年代にウィリアム・アップルマン・ウィリアムズを中心として正統派歴史学にたいする批判的見地を確立してきたいわゆる「ウィコンシン」学派をさしていることはいうまでもない。著者の最初の合衆国滞在は1953—4年のことであった。そして、50年代のアメリカ史学界のこの分野での業績は、著者もいうように、「全く無批判的な、実際ひとりよがりの実証主義的現象記述」(S.353)に終始していたのである。そういう現状にたいして一矢を放とうとして著者はこの分野での研究に乗り出したものであろう。

アメリカ合衆国におけるアメリカ史学を貫ぬいている1つの特徴は、いろいろな意味での「アメリカ例外」論が提出されてきたことであろう。もちろん、ヨーロッパ史の研究の中できたえられてきた法則や理論がかんたんにアメリカ史に適用できないことは確かである。しかし、逆に「例外」論的接近は世界史的普遍性との連関をたちきりかねない弱点をもっているばかりでなく、無批判的な現状肯定の結論をもたらしかねない。アメリカ帝国主

H. -U. ヴェーラー

## 『アメリカ帝国主義の興隆』

Hans-Ulrich Wehler, *Der Aufstieg des amerikanischen Imperialismus: Studien zur Entwicklung des Imperium Americanum, 1865-1900*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen 1974, 426 pp.

## 1

本書は、1865年から世紀転換期にいたるアメリカ帝

義成立史についていえば、帝国主義概念をヨーロッパ的植民地主義というきわめて狭い意味に限定し、海外の領土を併合することを直接の行動目標としてこなかったアメリカ合衆国に帝国主義概念は適用できないとするのがアメリカ史学界の通説となった。同時に、フィリピン併合をとまなう1898年の米西戦争を頂点とするむきだしの膨張主義は「大なる逸脱」であったとされ、しかもこのときの膨張主義にビジネス側は反対かもしくは無関心であったという「ビジネス無罪論」がアメリカ資本主義と帝国主義との連関をたちきってみごとなアメリカ帝国主義美化論を定着させてきた。

これらの通説に挑戦してウィスコンシン学派は、「ビジネス無罪論」を批判する実証研究を提出すると同時にアメリカ史を建国以来の不断の膨張主義の歴史として把握することによって「大なる逸脱」説を否定し、アメリカ帝国主義については、領土拡張を旨とする旧来のヨーロッパ型植民地主義・帝国主義とは異なり informal empire の建設を狙う「門戸開放帝国主義」(Open Door Imperialism)と把握した。

ウィスコンシン学派の通説へのこうした挑戦は、アメリカ資本主義・帝国主義の研究に新機軸をもたらす画期的な貢献であった。本書の著者がいましばらくこの動向をみきわめようと決意したことは納得できることである。

### 3

さて、本書は、基本的にはウィスコンシン学派と同じ路線に立つものであるが、しかしたんにその焼き直しでないことはいうまでもない。

ウィスコンシン学派のアプローチのアキレス腱は、アメリカ史を貫く膨張主義を強調することによって「大なる逸脱」説を批判するに急なあまり、世紀転換期においてアメリカ合衆国が1個の世界勢力として世界政治・経済に登場する段階的な意義が把握されないかもしくは軽視されがちな点である。実際、ウィスコンシン学派によって書かれた1教科書(Lloyd C. Gardner et al., *Creation of the American Empire: U. S. Diplomatic History*, 1973)は、世紀転換期の対外膨張を論ずる第12章を次のことばで始めるのである。[1890年代は膨張主義の衝動の鋭い加速化を特徴とした]。アメリカ史を貫く膨張主義のたんなる「加速化」、つまり急激ではあるがあくまでも量的な変化としてしか把握されていないのである。

これにたいしてヴェーラーは、アメリカの工業力の世界的地位の向上を重視する。かれにあっては、膨張主義という「数世紀の発展をのっぺらぼうにする全体的集合概念は大して役に立たない」(S.18)のである。「累積的な、

しかし不均等な持続運動のモーターとしての永続的に拡大する経済の形成——それが、なかならず、似たような動機をもつ工業諸国との世界市場での闘争への促迫を例外的に鋭くした——は、経済的動力とたえざる社会的変化を伴う国の社会的政治的諸問題とによって、膨張それ自体にとっても膨張の対象となる諸国にとっても新しい持続的な諸条件をつくりだしたのである。このような内的構造変化なしには……アメリカ帝国主義は適切に理解されえない」(S.18—19)。

それと関連して、帝国主義的対外膨張の経済的原動力の問題がある。ウィリアムズの学説の中では、アメリカ農民の世界市場への要求が対外膨張の原動力としてかなり強調されている。そして、そのことは実際強調されてしかるべきことである。アメリカの農業セクターはヨーロッパのそれとはおよそ比較できないほど商業化されていた。そのため、19世紀第4四半紀における農業の過剰能力の顕在化は海外への輸出の拡大をたえず解決の道としていた。この要因が、アメリカ帝国主義形成にとって重要な要因であったことは疑いない。

ヴェーラーは、旧来の膨張主義の伝統と新しい帝国主義的要求との結節点に商業農民の要求を置くというテーゼを提出している。「合衆国の膨張主義の伝統は近代帝国主義へのこの移行を促進した。このさい、商業化された市場志向型の農業経済が、旧来の大陸内部への領土拡大と、新しい工業化によって促進された対外拡張とのあいだのいわば連結環を置いた。なぜなら、この農業セクターにおいてははじめに新しい傾向が実現され、工業経済の利害結集がまとまる以前に、同盟のための目標概念が展開されたからである」(S. 271)。

最後に、先に紹介したように、本書は当時活躍した有力者の残したマニユスクリプツの詳細な検討を基礎にしているから、帝国主義対外政策の形成過程をその主体の側の心理やイデオロギーに立ち至って分析している点が興味深いことである。ヴェーラーも経済恐慌を中心とする内的危機を対外膨張で解決しようとする点に帝国主義形成の基本を求めるとのであるが、それを「社会革命」の「社会帝国主義」への転化として把握する。「社会帝国主義を当時の諸条件のもとでの現実的分析の結論として把握するにせよ、特権層のイデオロギー化された誇張と把握するにせよ、それが政策決定に論証可能な影響を与えた」(S. 42)というわけである。すなわち、ヴェーラーの分析は、この政策形成の側面からの「ビジネス無罪論」批判をなしているのである。

[平井規之]